

【岡山】障害や持病があってもスポーツを楽しむ人を増やしたい-大野洋平・岡山大学病院総合内科・総合診療科医師に聞く◆Vol.2

総合診療科からリハビリテーション科へキャリアチェンジ

2024年2月16日（金）配信 m3.com地域版

岡山大学病院は総合内科・総合診療科内に2023年9月、パラアスリートのメディカルチェックなどを行う「パラアスリートヘルスケア外来」を開設した。県内初の専門外来開設のきっかけを作った担当医の大野洋平氏は、日本肢体不自由者卓球協会のチームドクター、日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ医として活躍し、リハビリテーションの専門医でもある。大野氏がパラスポーツに関わるようになったきっかけ、リハビリ専門医を目指した理由、今後の展望について聞く。（2024年1月12日にオンラインでインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

——今回の外来開設の背景には、パラ卓球協会のチームドクターやパラスポーツ医としてのご経験があったとのこと。パラスポーツに関わるようになったきっかけは。

私は中学時代から卓球を続けているのですが、福岡大学の医学生のおとき、偶然街の卓球場でパラ卓球の日本代表選手と知り合ったことがパラ卓球と関わるようになったきっかけです。その選手は両足が不自由なのですが普段から健常者に混じって練習しており、私と試合をすると私よりはるかに強いことを体感しました。そこから仲良くなって一緒に練習するようになったのですが、ある時その選手に誘われてパラ卓球の試合を見に行きました。そこで試合を運営していた日本肢体不自由者卓球協会の存在を知って興味を持ち、2017年からチームドクターとしてお仕事をさせていただくようになりました。現在は日本代表選手のメディカルサポート、クラス分けなどを担当しています。



大野洋平氏

——医師のキャリアとしては、練馬光が丘病院総合診療科での後期研修後に転身し、東京大学医学部附属病院リハビリテーション科の新専門医制度下で研修を行いリハビリテーションの専門医を取得されました。キャリアチェンジの理由、リハビリテーション科での業務内容について教えてください。

初期研修修了時は総合診療医の道を進むつもりでしたが、チームドクターとしてパラ卓球に関わるなかで、選手が持つ麻痺や切断などの障害を深く理解する必要があると感じ、リハビリテーション科の専門研修と、パラスポーツ医の資格取得を決めました。

また、急性期病院の総合診療科で誤嚥性肺炎や脳卒中の患者さんをたくさん診療する中で、その患者さん方が退院後どのような経過を辿るのか気になったこと、摂食・嚥下機能や身体機能の評価や改善方法そのものについて興味を持ったことも理由でした。

総合診療科を志した理由として、実は、私は大学1年生の時にクローン病の診断を受けて入院治療を経験したのですが、診断に至るまで約6年かかったという経緯があり、全身を幅広く診られることや的確に診断できることに魅力を感じました。その後はクローン病の症状をコントロールしながら仕事を続けられていますが、総合診療科時代は当直などで疲れがたまったときに腸に負担を感じることもありました。そのため緊急性の高い業務が少ないリハビリテーション科なら、症状をコントロールできる環境をつくりやすいのではと考えたこともリハビリテーション科へ移った理由の一つです。

リハビリテーション科の専門研修では国立病院機構東京病院リハビリテーション科、埼玉県の国立障害者リハビリテーションセンター病院リハビリテーション科などに勤務し、急性期では主科からのリハビリテーション依頼を受けて診察やリハビリテーション処方をしたり、回復期病棟では治療がリハビリテーション中心の患者さんの内科的管理や退院調整、また、生活期では外来リハビリテーションや訪問リハビリテーションの指示やチェックなどを担当しました。

やりがいは、患者さんの回復と一緒に喜ぶことができること。中枢神経障害や切断などの回復不能な障害を持つ患者さんも多く、精神面も含めてサポートすることが難しい局面もありましたが、義足や装具などの代替手段を用いたり、スポーツを含めてこれまでとは別の社会的役割を模索することで、患者さんの社会復帰をサポートできることに喜びを感じました。

また、内科や外科の治療は「薬や手術による治療を受けて安静に」というものが多いですが、リハビリテーションは自分から動いて「自分で自分を良くする」という考え方が基本にあります。日本リハビリテーション医学会では「活動を育む医学」をスローガンに掲げており、自分の生活や活動にアプローチすることで全身の回復を目指すという、一般的な医学とは逆のアプローチにも面白さを感じました。

——リハビリテーション科の業務でも、パラアスリートやパラスポーツとの関わりはあったのですか。

東京大学医学部附属病院や国立障害者リハビリテーションセンターでは、パラアスリートのメディカルチェック外来もあり、さまざまな競技選手の診療に関わりました。また、国立障害者リハビリテーションセンター病院には脊髄損傷や切断の方が多く来られるのですが、基礎的なリハビリテーションを終えた次のステップとして「パラスポーツをやってみたい」という方が多くいらっしゃいました。病院の体育館は車いすバスケットや車いす卓球などができる環境でしたから、私もよく患者さんと一緒に卓球をしていました。

実は私が担当した患者さんで、脊髄損傷を受傷してから車いす卓球を始めた方がいるのですが、今では全国大会で活躍されています。他にもリハビリを経てさまざまなパラスポーツで本格的にパラアスリートとして頑張っている方も何人かいて、とてもうれしく思います。

——日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ医としての活動内容について教えてください。

パラスポーツ医は、障害者が安全にスポーツに安全に取り組むための医学的管理や指導などが主な仕事で、具体的には国際大会の帯同医、国内大会の救護医、各競技団体のチームドクターなどの業務があります。

私は基本的には日本肢体不自由者卓球協会のチームドクターとしての活動がメインですが、東京パラリンピックでは救護医として海外選手も含めたさまざまな選手と関わりました。現在は2024年のパラリンピックに向けて、パラ卓球の代表選手選考、強化指定選手健康診断、ドーピング関係の使用薬剤のチェックなどを行っています。強化指定選手の合宿などの強化活動は関東が中心なのですが、私は関東にいる日本肢体不自由者卓球協会所属の理学療法士や作業療法士などと連携し、主にオンラインでサポート活動をしています。

——大野先生は、パラスポーツのどのような点に魅力を感じますか。

医師の視点から見ると、障害を持つことによって生じる運動量が減るなどの身体機能低下や、気分の落ち込みなどの精神面の低下をスポーツによって予防・改善できるという、障害者の健康に寄与できることが挙げられます。また、義足や装具など代替手段を上手に活用することで健常者と同等、または健常者を上回るようなパフォーマンスが可能であることが挙げられると思います。

もう一つの魅力は、健常者と障害者が一緒（＝パラレル）にスポーツを楽しむこと。個人的にはやはり卓球が好きでパラ卓球の選手をずっと応援していますが、実際に関わりを持った他競技の選手も気になるので、いろいろなパラスポーツの結果をチェックしています。

——今後のパラアスリートヘルスケア外来の展望と、医師へのメッセージをお願いします。

先述の通り、当外来としては世界・全国レベルの選手から、これからパラスポーツを始めたいという方まで幅広く関わっていききたいです。その中で、障害や持病があるからスポーツを諦めるのではなく、工夫次第で安全にスポーツに取り組み、スポーツの楽しさを感じられる人を増やしたいと願っています。医療的介入によってより長く健康的にスポーツを続けられる場合も多いと思いますので、ぜひ気軽に当外来を受診していただきたいです。また他科・他施設から患者さんのご紹介も随時受け付けています。

同時に、障害者の中でもスポーツをしている方はまだ少なく、彼らをサポートする医師・医療職が少ないのも現状です。医師の方々にはぜひパラスポーツを支える・応援する分野があることを知っていただき、もし興味があれば当外来やパラスポーツの現場を見に来ていただけたらうれしいです。

◆大野 洋平（おおの・ようへい）氏

2014年福岡大学医学部卒業。岡山大学病院での初期研修を経て、2016年から練馬光が丘病院総合診療科で後期研修。2018年春にキャリアチェンジし、東京大学医学部附属病院リハビリテーション科の新専門医制度下での研修プログラムを開始。国立病院機構東京病院リハビリテーション科（東京都清瀬市）、国立障害者リハビリテーションセンター病院リハビリテーション科（埼玉県所沢市）などに勤務。2017年より一般社団法人日本肢体不自由者卓球協会チームドクター。2020年日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ医、2021年リハビリテーション科専門医取得。2023年4月より岡山大学学術研究院医歯薬学域（医）瀬戸内（まるがめ）総合診療医学講座助教。

【取材・文＝渡辺満樹子】（写真は岡山大学病院提供）

記事検索

ニュース・医療維新を検索

